

コラムの修正案

(p16) — 「ちゃん付け」はいけないこと? —

職場などで、男性が女性に対し、「〇〇ちゃん」と呼ぶ場面を見聞きしたことはありませんか。

呼ばれた側がどのように受け止めるかは状況によりますが、呼ぶ側は親しみを込めたつもりでも、呼ばれた側が不快に感じたり、見下されている、軽視されていると感じたりすることもあります。男性の同僚が女性を「〇〇ちゃん」と呼んだことや、それに関係する行動がセクシュアルハラスメントにあたるとして、裁判で賠償命令が出された事例もあります。

ジェンダー平等は、実は私たちの生活のなかの何気ない言葉の使い方一つひとつにも深く関わっています。身近な場面で使っている言葉を少し立ち止まって見直すことが、お互いを尊重し合う対等な関係を築く第一歩になります。

(p33) — 性の多様性とは? —

性のあり方（セクシャリティ）は多様であり、それらを表すさまざまな言葉があります。

一般によく聞くのは、「LGBT」「LGBTs」ではないでしょうか。L=レズビアン（女性同性愛者）、G=ゲイ（男性同性愛者）、B=バイセクシャル（両性愛者）、T=トランスジェンダー（生まれた時の性別と自身の認識する性が異なる人）、s=その他（上記に当てはまらない多様な性のあり方を含む）の頭文字をとった言葉です。「LGBTQ」「LGBTQ+」という言葉が使われることもあります。

これらは「セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）」を表す言葉・概念ですが、そもそも性のあり方は、特定の人々の課題ではなく、すべての人に関わる人権の課題です。近年では、性のあり方をこのように捉えるために、「SOGI」「SOGIE」という言葉・概念が着目されています。「SOGIE」とは、性的指向（Sexual Orientation）、性自認（Gender Identity）、性表現（Gender Expression）から成る言葉です。すべての人が性のあり方を自分ごととして考えるとともに、どのような性的指向、性自認であっても安心して暮らせ、平等に人権が尊重されることが大切です。

(p45) — 「誰一人取り残さない」防災・災害対応 —

社会は、性別、年齢、障がいの有無、健康状態、言語、宗教など、さまざまな背景をもつ人々によって構成されています。災害時には、社会において脆弱な状況にある人々が、より多くの影響を受けることが指摘されており、こうした一人ひとりの違いを踏まえた配慮が欠かせません。

ジェンダーに関わるさまざまな調査でも、非常時には、平常時における固定的な性別役割分担意識が強化され、ケア役割や性暴力などの課題や不平等が深刻化することがわかっています。頻発化する災害に備え、災害時の困難を最小限にするには、平常時から、さまざまな男女格差の是正に取り組むとともに、多様な人々がまちづくりの意思決定のプロセスに参画することが必要でしょう。

私たち一人ひとりが、普段から「さまざまな人がいること」を前提に、お互いを尊重しながら生活することが、非常時の要配慮者への支援の充実や、「誰一人取り残さない」災害に強いまちづくりにつながります。

(p64) — 多様な健康課題とジェンダー平等 —

性差による身体の違い、年齢等によって、人それぞれ抱える健康課題は異なります。

心と身体の健康づくりは、男性にとってももちろん大切なことですが、企業等の健康経営では、なぜ女性の健康課題に対する取組への関心が高まっているのでしょうか。

その背景には、一つには、女性の心身は、年齢やライフステージによって女性ホルモンの分泌量が大きく変化し、それにもなってかかりやすい病気も変動することがあります。

二つ目に、経営者や管理職の多くを男性が占める従来の組織では、このような女性の多様な健康課題への支援ニーズに対し、これまで十分に取組んでこなかったことがあるでしょう。月経随伴症等の女性の健康課題への対策を、組織が怠ることによる経済損失の大きさも指摘されるようになってきました。

心の不調や更年期、がんなどの治療と仕事との両立支援も、男女双方に対する健康経営の重要課題となっています。男女が互いの性差に応じた健康課題について理解を深めつつ、生涯にわたり人権が尊重される社会を目指していくことが大切です。